

5項目。および STAI-Y1) のスコアが有意に低下した。主観記述では、多くの被験者が、頭が活性化して冴えた感覚になり、気分がすっきりしたと答えた。一方、上まぶただけを上げる、下まぶただけを下げる、あるいはまぶたに指を当てるだけでは、感情評価テストに有意な変化はなかった。

【結語】 上下のまぶたの受動的開眼により感情/気分が変化することを示した。また被験者の多くは頭が活性化すると答えた。受動的表情変化は皮膚の単純な変形刺激である。これまでの生理学では説明がつかないことであるが、皮膚からの求心性情報が脳内に感情/気分を生起させるという新しい原理の発見を意味する。今回は健常者を対象に行ったが、心の病を抱える人の気分や症状を改善できるかどうか、興味あるテーマである。

P2-42.

当院小児科における West 症候群の長期発達予後

(小児科学)

○笹本 武明、森下那月美、竹下 美佳
森地振一郎、石田 悠、小穴 信吾
山中 岳、宮島 祐、河島 尚志

【はじめに】 West 症候群 (WS) の発達予後は、基礎疾患の有無や治療開始時期、治療内容、治療に対する反応等様々な要因に影響される事が報告されている。

【目的】 当院で診断・治療された West 症候群について長期発達予後を中心に検討した。

【対象・方法】 1989年から2013年の24年間に当院にてWSと診断した34例のうち、追跡しえた29例を対象とし、基礎疾患、治療内容及び発達予後などの臨床像に関して後方視的に検討した。潜因性WSは①発症前に発達遅滞がない、②血液・画像検査にて明らかな異常所見がない、③他の明らかな神経学的異常を合併しないという基準をすべて満たすものとし、症候性WSは基礎疾患を出生前要因、周産期要因、出生後要因に分類した。評価対象とした発達検査は15ヵ月～66ヵ月(平均43ヵ月)に施行されており発達指数または知能指数75以上を予後良行群、それ以外を予後不良群とした。

【結果】 性別は男児9例：女児0例、WS発症月齢

は平均6.8ヵ月(3～15ヵ月、標準偏差3.6)、発症から治療開始までの期間は中央値28.5日(0～150日)であった。潜因性WS8例中7例は予後良好であり、症候性WSは21例中19例が予後不良であった。症候性WSの基礎疾患は出生前要因12例(染色体異常、脳形成異常、結節性硬化症、Aicardi症候群、先天性感染症疑い)、周産期障害6例(早期産、低出生体重児、新生児仮死)、出生後要因2例(化膿性髄膜炎後遺症)、不明1例であった。予後不良な潜因性WS1例はACTH療法後に再発を認めていた。重度の精神発達遅滞を呈した症候性WS15例の基礎疾患は出生前要因であった。

【結論】 WSの予後は基礎疾患の有無に依存しており、潜因性WSの予後は良好であったのに対し、出生前要因の基礎疾患を有する症例は極めて予後不良であった。

P3-43.

EGFR-independent autophagy induction with gefitinib and enhancement of its cytotoxic effect by targeting autophagy with clarithromycin in non-small cell lung cancer cells

(医学部医学科5年)

○伊藤謙太郎、○杉田 翔平

(医学部医学科4年)

山城優太郎

(生化学)

森谷 昇太、車 暁芳、平本 正樹

宮澤 啓介

(臨床腫瘍科)

横山 智央

EGFRに対する分子標的薬ゲフィチニブ(GEF)は変異型EGFRを発現するPC-9、野生型EGFRを発現するA549、H226のNSCLC3細胞株においてオートファジーを強力に誘導した。興味深いことに、MEFならびにEGFRを発現していない白血病細胞株K562、HL-60においても同様にGEFのオートファジー誘導能が観察された。さらに、CRISPR/Cas9システムによりA549細胞株のEGFRを完全にノックアウトしても、野生型A549と同様にGEFのオートファジー誘導能が認められた。これよりGEFによるオートファジー誘導はEGFRキナーゼ阻害に